

# 北海道近現代史研究会・第三回現地視察レポート

## 根室市・厚岸町・標茶町・釧路市を訪ねて

正木浩司

はじめに

北海道地方自治研究所の設置する「北海道近現代史研究会」（主査＝押谷一・酪農学園大学教授）<sup>①</sup>は、二〇二一年一〇月一三日～一六日、第三回目の現地視察として、道東の釧根エリアを訪問した。当初の計画では同年六月上旬の実施を予定していたが、同年春～秋の期間は新型コロナウイルスの感染状況が落ち着かず、北海道においても緊急事態宣言の発令・延長などがくり返されたため、三度の延期（日程変更）を経ての実施となった。<sup>②</sup>

同研究会では、二〇二〇年八月に第一回目として道南方面（函館市、松前町、江差町など）、同年十一月に第二回目としてオホーツク方面（北見市、佐呂間町、網走市など）を訪れ、各地の史跡や博物館施設などの現地視察を行い、江戸時代に端を発する北海道およびその周辺地域での日口開

係史、アイヌ民族の歴史と文化、明治開拓期の移民や屯田兵、特に強制労働（囚人労働、タコ部屋労働）の歴史的事実などを中心に学び、あらためて北海道の近世・近代史に関する知見を深めてきたところである。

これらに続く第三回視察では、訪問先に釧根エリアを選び、根室市、厚岸町、標茶町、釧路市阿寒地区にある史跡や施設をメインの視察先としながら、時間の許す限り、近隣のまちでも視察を行ってきた。

第三回視察のテーマとしては、一八世紀後半期の根室に始まる日口両国の通交・通商交渉の歴史、同二国間で現代にも未解決のまま領土問題が続く北方四島の歴史、チャシ等の史跡にみるアイヌ民族の歴史、「蝦夷三官寺」と総称される道内最古の寺院の一つ「国泰寺」の設置経緯と往時の活動、網走監獄の分監元である釧路集治監と囚人労働の歴史などが念頭に置かれた。

本稿は第三回現地視察について概括的に報告することを目的としている。

### 1. 日口通交・通商交渉の始まりの地ノツカマップ

旅程初日、朝七時前に札幌駅を出発する特急に乗車し、約四時間かけてまず釧路駅へ。途中、タンチョウとの衝突事故による遅れもあって、釧路駅で慌ただしく根室本線花咲線の普通列車に乗り換え、さらに約二時間かけて根室駅へ。根室到着は午後一時半を過ぎており、北海道の広大さをあらためて実感する。

今回は初めて、参加メンバーが全員同時に根室市入りしたこと、到着後すぐにレンタカーを受領し、昼食も休憩も取らず、午後二時頃から市内での巡察を開始した。最初に目指したのは、根室半島の先端部、北海道の最東端に位置するこ

## <付表1> 第3回現地視察の主な視察先

### 第1日目(10/13)

	史跡・施設名	所在地
1	ノッカマフ1号・2号チャン跡	根室市牧の内
2	根室市北方領土資料館	根室市納沙布岬33-2
3	望郷の岬公園 —望郷の家・北方館、四島の架け橋ほか	根室市納沙布36-6
4	納沙布岬灯台	根室市納沙布
5	道立北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)	根室市穂香110-9

### 第2日目(10/14)

	史跡・施設名	所在地
1	根室国後間海底電線陸揚施設	根室市西浜町7丁目220
2	ときわ台公園 —ラクスマン来航記念碑「歴史の然」	根室市清隆町3丁目3
3	金刀比羅神社 —高田屋嘉兵衛銅像	根室市琴平町1丁目4
4	根室市歴史と自然の資料館	根室市花咲港209
5	厚岸町海事記念館	厚岸町真栄3丁目4
6	厚岸神社 —近藤重蔵建立碑文	厚岸町湾月1丁目3
7	厚岸町郷土館	厚岸町湾月1丁目2
8	蝦夷三官寺・国泰寺跡/臨済宗国泰寺	厚岸町湾月1丁目5
9	厚岸町太田屯田開拓記念館	厚岸町太田5の通り23-1
10	標茶町博物館ニタイト —北海道集治監釧路分監本館ほか	標茶町字塘路原野北8線58-9
11	阿寒湖の森ナイトウォーク カムイルミナ	釧路市阿寒町阿寒湖温泉1丁目5-20

### 第3日目(10/15)

	史跡・施設名	所在地
1	阿寒湖遊覧船乗船～まりも展示観察センター	釧路市阿寒町阿寒湖温泉(チュウルイ島)
2	阿寒湖畔エコミュージアムセンター	釧路市阿寒町阿寒湖温泉1丁目1-1
3	阿寒湖アイヌコタン	釧路市阿寒町阿寒湖温泉4丁目7-19
4	下雪裡コミュニティセンター —「雪裡発祥の地」碑	鶴居村字下雪裡
5	鳥取神社・鳥取百年館	釧路市鳥取大通4丁目2-18

### 第4日目(10/16)

	史跡・施設名	所在地
1	釧路市水産資料展示室(マリン・トボスクしろ)	釧路市浜町3-18 しろ水産センター3階
2	釧路国一之宮 厳島神社	釧路市米町1丁目3-18
3	釧路市立博物館	釧路市春湖台1-7

とで知られる「納沙布岬」のエリア。根室から西に進していく翌日からの旅程を考えると、先に東側の視察を済ませておくのは効率的で時間のロスが少ない。

しかし、筆者は以前から、根室での最初の視察先を納沙布岬とは別なところに決めていた。市の中心部を出発し、根室半島の北側(オホーツク海

側)を東西に貫く道道三五号線を東進していくと、納沙布岬までの道のりのちょうど中間あたり、牧の内という地区に「ノッカマップ岬」という岬がある。この岬こそ、筆者が最初に訪れたかった場所であった。ここには現在、年季の入った「ノッカマップ埼灯台」<sup>3)</sup>がオホーツク海に面する広大な草原に一つ設置されているだけの景色が広がる。

決してわかりやすい場所にあるとも言えないが、近隣には風力発電用の巨大な風車が二基設置され、この岬の在処を示す目印にもなっている。

ノッカマップを最初の訪問先にしたかった理由は、ここがかつて、ロシア人が初めて、日本との通商交渉を求めるといった目的をもって北海道本土に來航した際の上陸地点だったからである。<sup>5)</sup>

一八世紀後半、エカチエリーナ二世(在位一七六二〜九六年)の治世下にあったロマノフ朝ロシア帝国(一六一三〜一九一七年)は、極東の地方政府経由でいくつかの商會をカムチャツカ半島や千島列島に派遣し、この地域の資源調査などを進めていた。ロシアが千島列島を南進してきた目的は、得撫島の周辺海域に多く棲息し、防寒着の材料になる毛皮が貴重品とされていたラッコの捕獲などであったという。あわせて、当時南千島に暮らしていた千島アイヌの人々に対しては、ロシア国籍への編入や、毛皮等の現物課税(ヤサーク)の徴収など、領土拡大の作業も進めていた。

そうしたなか、一七七八(安永七)年六月、千島アイヌの首長の案内のもと、商人のシャバリン(Shabalin)ら一行を乗せたロシア船ナタリア号が遂に北海道本土に現れる。そして、その際の上陸地点がこのノッカマップであった。<sup>6)</sup>ここで数カ月間滞在した後、ナタリア号はいったん帰国するも、翌一七七九(安永八)年に北海道に再来航している。後述のとおり、二度目の來航時はアッケシ(現在の厚岸町筑紫恋地区)に上陸し、松前藩



ときわ台公園 「ラクスマン来航記念碑 歴史の然」

の藩士に対してあらためて日本との通商を求めたが、藩の判断で拒絶されている<sup>19)</sup>。

それから一三年後の一七九二(寛政四)年一月、ロシア帝国は初の公式遣日使節を派遣してくる。アダム・ラクスマン(Adam Laxman)の一行である。彼らの乗る帆船エカテリーナ号の来航地も根室(現在の根室港)であった。ラクスマンの来航目的は、大黒屋光太夫ら日本人漂流民の送還と、イルクーツク総督による通商要望の信書を幕府に渡すことの二点。一行は根室で一冬を越した後、松前で幕府派遣の役人(宣諭使)と交渉し、

信書の受け取りは幕府に拒否されるも、その後の長崎での交渉を約束した信牌(入港許可証)を受け取り、母国へ帰還した。根室は非公式にも公式にも、日ロ両国家間の通交・通商交渉の始まりの地である<sup>20)</sup>。

なお、日ロ関係はこの後、第二次使節ニコライ・レザノフ(Nikolai Petrovich Rezanov)の来航とその通商交渉の失敗以降、緊張関係を高めていく。一八一(文化八)年にはいわゆる「ゴローニン事件」が発生し、緊張はピークに達するが、廻船商人の高田屋嘉兵衛らの活躍により危機を脱し、一定の落ち着きを取り戻すことになった。根室港を望む高台に位置する「金刀比羅神社」(根室市琴平町一四)は、嘉兵衛が一八〇六(文化三)年に創始した神社である。その境内には彼の銅像が建立され、根室開拓や日ロ紛争解決の功績などを讀んでいる。

ラクスマンの根室来航に関わっては、根室市内に記念碑が建立されている。市役所隣接の「ときわ台公園」(根室市清隆町三三三)内に置かれた「ラクスマン来航記念碑 歴史の然」(池田良二制作、一九九四年一月二〇日建立)である。現地敷設の石版の解説によると、日本語・英語・ロシア語の三つの言語で、「日本国とロシア国との通交・通商交渉は、実にこのアダム・ラクスマンの根室来航から始まった。この歴史的事実を誇りとし、未来へ永く伝えるため」に、この碑が建立された<sup>21)</sup>とある。

あわせて、「根室市歴史と自然の博物館」(根室市花咲港二〇九)には、根室市指定有形文化財の指定(一九九三年六月二九日指定)を受けている『俄羅斯船之圖』をはじめ、ラクスマン来航関係の図画や地図といった史料を展示するスペースが設けられており、知見を深めることができる。

## 2. アイヌ民族の要地としてのノッカマップ

節を改めるが、ノッカマップという場所についてはまだ記しておかなければならないことがある。

灯台から道道三五号線に戻り東進していくと、程なく史跡の案内看板に出くわす。道道沿いの駐車場に車を停め、そこから海岸方向へ数分歩いて行くと、オホーツク海を望む崖の上に、「ノッカマフ一号・二号チャシ跡」というアイヌ民族関係の史跡に辿り着く。素人目にはわかりづらいが、人の手で塚が掘られた痕跡が見取れる。

「チャシ」は、「砦」、「館」、「柵」、「柵囲い」を意味するアイヌ語。一六〜一八世紀を中心に築造され、当初は城砦と解されたものの、その後の研究の進展や新たな発見などにより、見張り場、儀礼・儀式や談判の場など、多様な使い方をされていたことが明らかになってきているという<sup>22)</sup>。

チャシ跡はその痕跡が残る場所であり、現在のところ、全道に五〇〇カ所ほどが確認され、特に道東や日高地方に多いという。うち三二カ所が根室市にあり、さらにそのうちの二四カ所が「根室

半島チャシ跡群」として国指定史跡の指定（一九八三年四月二六日指定、一九八四年七月二五日追加指定）を受けている。チャシの形態上、五種（丘先式、面崖式、丘頂式、孤島式、平地式）に類型化され、ノッカマップの二つのチャシはいずれも面崖式に当たる。現在、根室市内の三二カ所のチャシ跡のうち、現場での観察が可能なのは、このノッカマップのもと「ランネモトチャシ跡」の二カ所だけである。ノッカマップ一号チャシは「幅五層深さ約三層の半円形の塚が七〇層×二五層の範囲で二つ連結しており、塚の内側に盛土が観察でき



ノッカマップ2号チャシ跡

るとされ、二号チャシは「幅約三層、深さ約〇・五層で半円形の浅い塚が巡っている」。チャシ跡があるということは、ノッカマップが少なくとも近世期においてはアイヌ民族にとって要地であったことを意味する。

ノッカマップが舞台の一つとして登場する近世北海道史の重大事がある。「クナシリ・メナシの戦い」である。ラクスマン来航の三年前、一七八九（寛政元）年に起きたこの戦いは、場所請負制度の下での苛烈な強制労働などを背景に起きた、アイヌ民族の最後の蜂起とされる。国後島と根室半島に暮らすアイヌ計一三〇人が参加し、場所の支配人ら和人七一人を殺害した。最終的に、松前藩から派遣された鎮圧軍に数人のアイヌ首長が協力し、彼らの降伏勧告によって蜂起者が武装解除に応じたため、終戦となった。その後、蜂起者一三〇人のうち、実際に和人を殺害した三七人が処刑されることになるが、その処刑の地がこのノッカマップであった。

この戦いで犠牲になった和人の慰霊碑「横死七十一人之墓」は、碑文によれば、一八一二（文化九）年につくられたとある。現在は、「寛政の蜂起和人殉難墓碑」の名で根室市指定史跡の指定（一九六七年七月二五日指定）を受け、後述する納沙布地区の「望郷の岬公園」内に実物を見ることができ

る。一方、アイヌ民族側では、一九七四（昭和四九）年以降、毎年九月末、ノッカマップにおいて「イ

チャルパ」という供養祭を執り行っている。こちらにはアイヌ側の犠牲者三七人だけでなく、前出の和人側の犠牲者七一人も供養の対象に含めているという。

現在はほとんどが草原のノッカマップだが、この場所には、日本とロシア、そしてアイヌ民族の近世史が重層的に交錯している。

### 3. 北方領土返還運動最前線のまち根室

ノッカマップの視察を終え、次に向かったのは根室半島の東端に位置する納沙布岬。車は二〇分ほどで、灯台の置かれる突端の手前のエリア、「望郷の岬公園」の広い駐車場に到着した。この公園の敷地内には、報道にも頻繁に登場する「四島のかげ橋」という巨大なモニュメントと「祈りの火」をはじめ、北方四島関係の施設「北方館／望郷の家」や、「望郷」、「返還」、「平和」をキーワードとした石碑等が多数設置されている。

根室市には、先述のとおり「日口通交・通商交渉の始まりのまち」としての側面もあるが、今となっては北方四島（国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島）の領有権をめぐる日口間の国境問題のまち、すなわち、「北方領土問題のまち」としての側面がより広く知られるところである。納沙布地区はその最前線と言える場所である。

北方領土問題の発生についてあらためて振り返ると、以下のとおり、いくつかの原因が根本にあ

る。<sup>⑩</sup>第二次世界大戦の終戦間近の時期に対日参戦してきた旧ソ連軍によって北方四島が占領され、その後実効支配を受けていること、日本の独立を認める「サンフランシスコ講和条約」（一九五一年九月署名）の中で、千島列島の領有権を日本が放棄させられたこと、同条約は日本に放棄を求めた千島列島の範囲と放棄後の帰属先を明確にしていなかったこと、旧ソ連は同条約に署名していないこと、などである。その上で、日本は北方四島は千島列島に含まれないという立場をとり、ここを実効支配する旧ソ連およびロシア共和国に対して、今日に到るまで四島の返還運動を続けてきたという流れである。実際に納沙布岬まで行くと、この問題の現実感をあらためて強烈に意識させられる。

同公園に隣接する「根室市北方領土資料館」（根室市納沙布三三）には、様々な史料や写真、年表、島に関する基本情報などが数多く展示されており、これらを通じて、北方四島の歴史や現状だけでなく、安藤石典・根室町長のマッカーサー元帥宛陳情（一九四五年一月）に始まるとされる北方領土返還運動の歴史についても学ぶことができる。また、館の受付では数点の資料が無料配付されているが、このうちの一つ『日本の領土 北方領土』は三〇〇冊超えの書籍であり、教科書を想起させる。「なるべく多くの日本国民に北方領土問題の実情を訴えること」を主目的とするこの施設の使命を端的に表していると感じるものであつた。



望郷の岬公園 四島のかけ橋

た。

当研究所の活動分野にも関係し、館内の展示で特に印象に残っているのは、北方四島における行政区画（郡・村）に関する情報である。一八六九（明治二）年八月の「北海道」の設置時（蝦夷地から北海道への改称時）、北方四島にも国郡制が敷かれ、千島国および根室国のもとに計六郡が設置されている。その後、付表2のとおり、四島の郡・村の数は分立・合併を経て最終的に五郡七村となり、計一万七〇〇〇人超の人々が暮らしていた。北方四島における領土問題が解決されず、

<付表2> 北方四島の郡・村、各人口（1945年8月現在）

島名	面積 (km <sup>2</sup> )	郡	村	人口
1 歯舞群島	93.3	花咲郡	歯舞村	5,281
	—			—
	12.1			986
	2.1			88
	9.9			501
	58.3			2,249
	10.9			1,457
2 色丹島	248.9	色丹郡	色丹村	1,038
3 国後島	1,489.3	国後郡	泊村	4,864
			留夜別村	2,500
4 択捉島	3,166.6	択捉郡	留別村	2,258
			紗那郡	紗那村
		薬取郡	薬取村	349
人口計				17,291

※ 根室市北方領土資料館の展示「北方領土の基本情報」（2021年10月13日閲覧）、無料配付資料『北方領土』（独立行政法人北方領土問題対策協会編）に基づき、2022年3月、正木作成。

日本の行政権が及ばないため、これら諸村は現在機能を停止しているが、制度上は存続している。「北海道総合振興局及び振興局の設置に関する条例」（平成二〇年六月三〇日北海道条例第七八号）（平成一二年六月三〇日北海道条例第七八号）別表第一を見ると、根室振興局の所管区域として、色丹村、泊村、留夜別村、留別村、紗那村、薬取村の六村（歯舞村は一九五九年に消滅）が明記されている。

なお、今次視察は当初予定の二〇二一年六月から同年一〇月まで延期になったと冒頭で書いた



根室国後国海底電信線陸揚施設の遺構

が、この間に北方四島に関係する動きが一つあった。根室市西浜地区にある「根室国後国海底電信線陸揚施設」の遺構が国の登録有形文化財（建造物）の指定を受けたのである。同施設は旧通信省によって敷設された根室と国後島を結ぶ海底ケーブルの陸揚げ施設であり、文化審議会の答申（二〇二一年七月一六日）によると、「国後島とのつながりを示す歴史的遺構」と評されている。

納沙布地区を去ると、根室半島の南側をしばらく西進し、市中心部も過ぎて国道四四号線をさらに西へ。閉館時間が迫る「北海道立北方四島交流

センター（ニ・ホ・ロ）」（根室市穂香二一〇一九）に滑り込み、センター二階にある「北方資料館展示室」を観覧して一日目の日程を終えた。

#### 4. 厚岸町に移動、蝦夷三官寺国泰寺跡を訪問

旅程二日目。この日は根室市から厚岸町、標茶町を経て、宿を予約している釧路市阿寒湖温泉地区へ向かうという長距離移動を予定していたことから、午前八時半には宿を立ち、根室市内の施設・史跡の巡察を再開した。前節で紹介した「根室国後国海底電信線陸揚施設」の遺構、ときわ台公園内「ラクスマン来航記念碑」、金刀比羅神社、根室市歴史と自然の博物館を午前うちに足早に巡り、次の目的地である厚岸町へ向かった。

国道四四号線をひたすら西進し、厚岸町に到着したのは正午過ぎ。混み合う道の駅内のレストラんで昼食を取った後、最初に向かったのは、町役場に隣接する「厚岸町海事記念館」（厚岸町真栄三三四）である。ここでは、館内展示を通じて同町の漁業の歴史などを学んだほか、受付窓口で視察予定の史跡の位置などについて確認をとった。その際に提供された『厚岸町文化めぐり』というリーフレットには、町内の史跡等が分布図とともに一覧化されている。先述の根室市同様、厚岸町にも多数のチャシ跡が遺されており、町指定文化財の「お供山チャシ跡群」（一九六〇年一〇月一日指定）をはじめ、計二七カ所に上る。

記念館を去ると、厚岸湾と厚岸湖をつなぐ水路上に架けられた厚岸大橋を通って対岸へ渡り、湾月地区に向かった。この地区には、「蝦夷三官寺」の一つ「国泰寺」（厚岸町湾月一丁目）と、その隣には「厚岸神社」および「厚岸町郷土館」がある。国泰寺は、有珠善光寺（伊達市）、様似等澗院（様似町）とともに「蝦夷三官寺」として「北海道遺産」の選定（二〇一八年一月一日、第三回選定分、第六二号）を受けている。やや複雑なのは、国泰寺自体は過去の遺構ではなく、臨済宗系の現役の寺院であり、「北海道遺産」の選定を受けている「国泰寺跡」とは、建物の基礎部分などに残る創建当初の国泰寺の遺構ということになる。

また、同寺所蔵の『蝦夷三官寺国泰寺関係資料』は、国の重要文化財に指定（二〇〇五年六月九日指定）されている。ここに含まれる『日鑑記』は、一八〇四（文化元）〜一八六三（文久三）年の六〇年間に渡り、国泰寺の歴代住職によって書き継がれてきた記録、「幕府の蝦夷地政策や異国船の来航、地震や津波、畑作の様子、山菜採取、アイヌ民族の人たちについてなど幅広い内容が残されており、当時の生活を知る上でも貴重な資料」であると、その資料性の高さが評価されている<sup>17)</sup>。

蝦夷三官寺の建立は、一八〇四（文化元）年、幕府による。ロシアの南進対策として、蝦夷地防衛の必要性を認識した幕府は、一七九九（寛政一）年より東蝦夷地を飯上知（暫定幕領化）し、一八〇七（文化四）年には蝦夷地全域を直轄化し



国泰寺



厚岸神社 近藤重蔵建立碑文

ている。この時期、蝦夷地に官設寺院を必要としたのは、一つは、蝦夷地各地に東北諸藩から警護の任で派遣されていた武士たちなど、蝦夷地で和人が死亡した場合、その菩提を弔うためである。あわせて、これもロシア対策の一環と解するが、アイヌ民族を仏教布教を通じて教化し、日本側に引き込むことも使命とされていた。

寺に隣接する「厚岸町郷土館」にも、前出の関係資料の複写本や解読集、寺に掲げられていた徳川家の菱紋など、近世期当時の国泰寺に関する貴重な資料が展示されている。同館の学芸員の説明

によると、その当時、国泰寺の住職には幕府から給料が支払われていたとのことである。

蝦夷三官寺という存在そのものにも、近世期の蝦夷地を舞台に交錯した日・露・アイヌ関係史の一端が凝縮されていると見る。国泰寺の境内には「アイヌ民族弔魂碑」が建立されている。一九七七年（昭和五二）年建立。一九世紀以降本格化した和人の蝦夷地進出の陰で、土地を失い、あるいは強制労働などの犠牲にもなったアイヌの人々の魂を慰霊している。

同じく湾月地区にある「厚岸神社」は、一七九

一（寛政三）年に最上徳内が創建した神明宮にルーツがある<sup>18</sup>。最上は、幕府によって一七八五〜八六（天明五〜六）年と一七九八（寛政一〇）年に派遣された蝦夷地探検隊にいずれも参画していた探検家であり、神明宮の建立は二回の蝦夷地探検の時期に行われたことになる。

実際に同神社を訪れて初めて知ったが、境内には近藤重蔵による石碑があった。碑文によると、近藤は一七九八（寛政一〇）年に社殿改修などを行ったという。近藤はこの年、蝦夷地探検隊の一員として道東を経て国後島・択捉島に渡り、択捉島に「大日本恵土呂府」の国標を建てたことで知られる。右記の社殿改修などを行ったのは、その帰路に厚岸に立ち寄った際とされる。同神社の創建も、アイヌの人々の教化と蝦夷地の守護が目的とされていた。

国泰寺周辺の巡察を終えると、そこから南進し、筑紫恋<sup>つくしこい</sup>という地区に向かった。第一節でも触れたとおり、同地区はロシア船ナタリア号が一七七九（安永八）年に再来航した際の上陸地である。ここにもチャシ跡<sup>チャシ</sup>が遺されており、ノッカマップと同様の状況にあるという点で興味深い<sup>19</sup>が、今回は残念ながら辿り着くことができなかった。

## 5. 厚岸町太田地区へ、屯田兵と旧太田村の歴史を学ぶ

厚岸町の中心部から道道一四号線を北西へ進ん

でいくと、程なく太田という地区に入る。ここには地区名を冠する町立の開拓記念館が設置されている。

厚岸町太田地区は、かつては「太田村」という自治体の南部を占める地区であったが、同村は一九五五（昭和三〇）年、いわゆる「昭和の大合併」の時期に、村域を南北に二分割された上、南部を厚岸町、北部を標茶町にそれぞれ編入合併されて消滅している。

「厚岸町太田屯田開拓記念館」（厚岸町太田五の通り二三一）は、この太田村の歴史に関する資料・史料を収集・保存し、これを伝承することを目的とする施設である。施設名に「屯田」とあるとおり、この地区の歴史には屯田兵が関わっている。

北海道への屯田兵の入植が進められるのは、一八七五（明治八）年から一八九九（明治三二）年までであり、最終的に計三七兵村が開設されている。このうち釧根エリアにおける開設は、根室市和田地区の二兵村と、この太田地区の二兵村、計四兵村に限られる。

太田地区に屯田兵が入るのは一八九〇（明治二三）年七月のことで、地元住民による兵村誘致活動を契機として設置されたことに特徴を有するという。北太田と南太田の二兵村にそれぞれ二二〇戸が入植し、当初の人口は二千人を超えていた。「最後の土族屯田」とも呼ばれる。厚岸港の防衛を主たる任務としつつ、農業不適地にあつて、酪

農と馬産で知られる兵村であったという。<sup>20)</sup>

本施設に展示される屯田兵の遺品の一部は、「太田屯田兵遺品」の登録名で厚岸町指定文化財の指定（一九六〇年一月一日指定）を受けている。遺品には「政府から支給された軍服や家具、開拓に必要な道具及び郷里から持ち込んだ家宝や生活用品、古文書など」が含まれる。

## 6. 標茶町に移動、釧路集治監を視察

太田地区での開拓記念館の視察を終えると、次の目的地である標茶町へ。ルート選択のミスもありながら、一時間半ほどかかって塘路湖の南側のエリアに位置する「標茶町博物館ニタイト」（標茶町字塘路原野北八線五八一九）に辿り着き、閉館三〇分前に滑り込んだ。

施設名にある「ニタイト」は、アイヌ語で「森」と「湖」を意味する二つの単語の合成語。「標茶町郷土館」を前身とし、数年前（二〇一八年七月）に開設されたばかりの新しい施設である。

同博物館は、町の自然と歴史を紹介する総合博物館として広範な分野にわたる資料・史料等を展示するが、敷地内に二つの移築建造物が建てられ、観覧可能とされていることが大きな特徴である。

ともに町指定文化財である「旧塘路駅通所」と「北海道集治監釧路分監本館」である。後者は一九六九（昭和四四）年に現在地に移築され、二〇一七年まで前出の「標茶町郷土館」として活用されて

いたという。<sup>21)</sup>二〇一九年に現在の姿にリニューアルされ、外観のみならず内部の観覧も可能になっている。

当研究会がここでの主たる視察先と目していたのが、この「北海道集治監釧路分監本館」（以下、釧路集治監）に他ならない。第二回現地視察で「博物館網走監獄」を訪れた際、中央道路（網走―北見峠間一六二・八km）開削工事（一八九一年五月―一月）における囚人労働の過酷な実態のほか、道内五カ所の集治監および囚人労働の歴史についても学ぶことができたが、網走監獄の始まりは「釧



北海道集治監釧路分監本館



路監獄署網走囚徒外役所」に遡る。「北海道開拓に囚人労働が果たした役割」というテーマは、当研究会にとって主要な関心事の一つになっている。

釧路集治監の開庁は一八八五（明治一八）年九月で、道内の集治監としては樺戸、空知に次いで三例目になる。地元では「標茶集治監」とも呼ばれたという。釧路集治監に課された任務は、大きくは以下の二つ。一つは、アトサヌプリ（跡佐登、硫黄山）で採掘された硫黄の運搬であり、ここでは亜硫酸ガスの吸引が失明や栄養失調を引き起こし、五〇〇人を超える死者を出したという。もう一つは、前節で紹介した太田屯田にかかる兵屋・付属施設の建設であり、これに先立って釧路集治監の囚徒は厚岸―標茶間四〇kmの道路開削工事（一八八七～八八年）にも従事させられた。

屯田兵の入植に先行して、沿岸部から内陸部へと分け入っていくための道路開削工事を囚人労働が担うという構造は、北見屯田の入植時などと共通するパターンである。

## 7. 釧路圏域におけるアイヌ民族の近現代史

標茶町での視察を終えたところで予定していた二日目の巡察は終了し、阿寒湖温泉地区へ向かうことにした。弟子屈町から国道二四一号線に入ると、時折路傍にエゾシカが現れて驚かされる夜道を一時間ほど西進し、午後六時半過ぎに宿泊先に到着した。同地区は二〇〇五年一〇月の三市町（釧



「カムイルミナ」スタート地点の看板

路市、阿寒町、音別町）合併を経て、現在は釧路市に属している。

宿に到着して程なく、近くの居酒屋で夕食をとり、これで二日目は終わりかと思いきや、まだ終わらず。その居酒屋で勧められ、阿寒湖畔で上演されている野外アトラクション「阿寒湖の森ナイトウォークカムイルミナ」に予定外ながら参加することになった。このアトラクションでは、参加者は、湖畔の夜道を歩きながら、数力所あるチェックポイントごとにプロジェクションマッピング等の技術によって樹上などに投影される映像



阿寒湖アイヌコタン

を辿り、一つのストーリーを追いかけていく仕掛けである。「自然との共生」の重要性を訴える、アイヌ神話をモチーフにしたストーリーであった。近年発信を強めるアイヌ文化の現代的な表現方法、あるいはアイヌ文化を基に創出された新たな観光資源と解する。

明けて旅程三日目は、まず午前九時発の阿寒湖遊覧船に乗船し、湖周辺の秋の景色を堪能した。一時間ほどで遊覧から戻ると、温泉街を西に向かった。

一九三四（昭和九）年の「阿寒国立公園」の指



「雪裡発祥の地」碑

定以降、温泉も出ることから、道内有数の観光地の一つとして栄えてきた阿寒湖温泉地区。その温泉街の西側の一角には、一九五九（昭和三四）年以来、アイヌ民族の集落が形成されている。この地区でのメインの視察先と考えていた「阿寒湖アイヌコタン」（釧路市阿寒町阿寒湖温泉四丁目）である。入口のゲートの上、大きく翼を広げたフクロウの彫刻が印象深い。ここには三十数戸のアイヌの人々が集住し、民芸品店や飲食店が軒を連ねており、伝統工芸品の販売などが行われている。二〇一二年には初のアイヌ文化専用室内劇場「アイヌシアターイコロ」も設置され、舞踊や人形劇などが上演されている。なお、敷地内の「アイヌ生活記念館」はコロナ禍により閉館中であり、残念ながら観覧は叶わなかった。

この土地は、現在は一般財団法人となっている「前田一步園」という事業体が「明治三十九年に国有未開地の払い下げを受けて、牧場として拓いた

のがはじまり」<sup>27</sup>であり、阿寒湖アイヌコタンは、三代目園主の前田光子氏により、アイヌの生活を守るため、店や住まいのための土地を無償で提供したことから始まった場所である。<sup>28</sup>

阿寒湖温泉地区での巡察を終えたのが正午近く。この日の夕方に釧路市中心部で当研究会主催の学習会の開催を予定していることから、市中心部方面に向かうことにした。このとき、前出のアトサヌプリ（硫黄山）の視察も検討したが、時間的に厳しいと判断し断念。その代わり、市中心部に向かう途中で通過する鶴居村に立ち寄ることにした。目指したのは、下雪裡<sup>しもゆり</sup>という地区である。

鶴居村はその村名からもうかがわれるとおりタンチョウの飛来地として広く知られる。村の観光スポットとして、タンチョウの観察や給餌の場として使われている「鶴見台」が有名だが、実はこれも下雪裡にある。

下雪裡に関心を持ったきっかけは一つの新聞記事による。『朝日新聞』（二〇二〇年九月一日付）朝刊・道内版に掲載された「強制移住の地消えたアイヌ民族」という見出しの記事である。記事には、「旧村史などによれば、一八八五（明治一八）年七月、現在の釧路市からアイヌ民族二七世帯一三八人が下雪裡地区に移住した」としながら、「釧路アイヌ文化懇話会」というサークルが、下雪裡を訪れて現地を調べたところ、そのような歴史的事実を伝える痕跡が現地には一切遺されていないという趣旨のことが記されている。

明治期以降、道内では一一方国の区域ごとに「旧土人保護地」が設定され、生来の生活地を追われたアイヌの人々は、その保護地への移住・集住を強制されたという。<sup>29</sup>アイヌ民族の強制移住と言われると、樺太アイヌの対雁移住（一八七六年）、千島アイヌの色丹島移住（一八八四年）を想起するが、北海道本土でも行われていたということである。旭川市の近文地区<sup>ちかぶん</sup>はよく知られる保護地の一つだが、他の保護地の所在地を調べるのは容易ではない。難儀しているところで右記の新聞記事を見つけ、釧路地域におけるアイヌ民族強制移住の状況を知る手掛かりになるのではないかと、関心が高まった次第である。

「鶴見台」から程近い場所にある「下雪裡コミュニティセンター」の敷地の一角に「雪裡発祥の地」の石碑が建立されており、ここを訪ねてみた。右記の新聞記事でも言及されていたが、その碑文には、鶴居村開拓の創始者である雪裡移住者の業績を讃える半面、アイヌ民族の強制移住に関することは一切記されていない。強制移住の問題は、強制労働と並ぶ北海道開拓史の隠された一面と考えるが、今回の視察でも、この問題の掘り起こしの難しさをあらためて実感させられるにとどまった。下雪裡を去ると、先述した当研究会主催の学習会のため、その会場である「釧路市生涯学習センター」へ向かった。講師は、元道議会議員で、全国樺太連盟の活動にも長く関わっていた岩崎守男氏にお願いし、出身地である南樺太からの引き揚

げや、同連盟での活動についてご講義をいただきたい。その内容については別稿を参照されたい。

なお、釧路市中心部（旧釧路市地区）では、この三日目の鶴居村からの道中と、翌日（旅程最終日）の午前中のわずかな時間で、「鳥取百年館」、「釧路市水産資料展示室（マリン・トボスくしろ）」、「釧路一之宮厳島神社」、「釧路市立博物館」を巡察し、一定の学びを得つつも、江戸時代一七世紀半ばに「クスリ商場」が置かれたことで釧路市発祥の地とされる「くしろ元町」エリアの史跡などは時間の都合でほとんど立ち寄れなかった。釧路市の近世・近現代史に関しては、捕鯨をはじめとする漁業や道東エリアの鉄道の拡大といった経済・産業史とも合わせて、より詳細な情報収集の機会をの到来を待ちたいと考えている。

## 8. まとめに代えて

本稿の執筆を開始したのは二月下旬。これと時期をほぼ同じくして、ロシア軍がウクライナに侵攻を開始し、その後もウクライナでの状況などを伝えるニュースが連日報じられている。本稿は北海道の近現代史をテーマとする現地視察のレポートであるが、ちょうど北方領土問題という日韓国境問題を扱っており、にわかに緊張感が高まりつつある両国関係の状況を見せつけられるなかで、歴史は単なる過去の出来事の積み重ねではなく、時には現代に表出するアクチュアリティを有

するものであると実感しながらの執筆となった。

今回の視察では、日韓国境間の交通・通商交渉の始まりの舞台となった根室市を訪れ、戦後から現代に続く北方領土問題の最前線である納沙布布地区で同問題の存在感を再認識する一方、両国の接触の始まりの地とされるノッカマップ地区では、今はほとんど何もない草原となった景観に、約二五〇年という長い月日の経過を実感することにもなった。このほか、初のロシア公式遣日使節ラクスマンの来航をまちの誇りと謳う、根室市建立の記念碑には、国家間関係に基づく思考とは別個に息づく地元自治体や民衆の思考の存在もろかがい知れた。

また、今回の視察で特に意識されたテーマの一つは、近世期以降に蝦夷地／北海道を舞台に展開した日韓国境間の関係の陰で翻弄され、土地や生業、文化を奪われてきた先住民アイヌ民族の歴史であった。日・ロ・アイヌの三者の歴史が交錯する関係の重層性は、ノッカマップや厚岸筑紫恋におけるロシア人上陸地とチャシ跡所在地の重複や、ロシア南進対策の一環として幕府が設営した蝦夷三官寺の二つの主な使命、すなわち、蝦夷地に派遣され蝦夷地で死亡した武士などの弔いと、仏教布教によるアイヌ民族の教化（日本人への精神的同化）などにその一端が垣間見えた。

今次視察でのこうした経験により、同じ北海道の近世・近代史であっても、開拓史観に基づき日本史に組み込まれた従来型の一面的な北海道史に

囚われず、アイヌ民族の立場からの歴史観や、ロシアをはじめとする諸外国側の北海道の捉え方も踏まえつつ、立体的に北海道史を見ていくことの重要性を再度実感させられた次第である。近年、世界に向けた発信を積極化させる阿寒地区でのアイヌ文化振興の取り組みには、過去の苦難の歴史と向き合いながら、未来に向かってこれを乗り越えていこうとする地域や住民の前向きな意識と可能性を感じる。

他方、今次視察を通じて、厚岸町の太田地区に入植した屯田兵について、彼らが釧路集治監の囚徒の囚人労働によつて開削された道路を通つて同地区に入り、同囚徒の囚人労働によつて建設された兵屋に入居し、この地の開拓に従事したという歴史的事実に関する学びを得た。前回視察に続き、またも囚人労働の問題にぶつかり、またも囚人労働と屯田兵入植との関係が明らかになったという印象である。まだ訪れていない他地域の屯田兵の歴史を調べる際にも、囚人労働との関係の有無、あつたとすればどのような関係だったのか、といったことは、念頭に置くべき必須のテーマとなるであろう。

当研究会では、今後も可能な限り、道内の歴史的な要地を訪れ、史跡・施設などの視察や情報・資料の収集を続ける所存であり、新たな学びや問題意識がさらに得られることを期待している。

【注】

- (1) 二〇一九年発足。メンバーは、押谷一（酪農学園大学教授／当研究所理事／当研究会主査）、竹中英泰（旭川大学名誉教授／当研究所理事）、三輪修彪（北海道労働文化協会理事／当研究所元専務理事）、正木浩司（当研究所研究員／当研究会事務局）。第三回現地視察への参加者は、押谷、三輪、正木の三人。本稿の執筆は事務局の正木が担当した。
- (2) 北海道における二〇二一年五月〜九月の新型コロナウイルスにかかる緊急事態宣言等の状況を踏まえて、第三回現地視察の実施日程を以下のとおり再調整した。①六月三日〜六日（延期）、②九月七日〜一〇日（延期）、③九月一五日〜一八日（延期）、④一〇月一三日〜一六日（実施）。
- (3) ノッカマップ埼灯台は、所管する根室海上保安部のウェブサイト掲載情報によると、一九六四（昭和三九）年四月一日に点灯が開始されたとある。
- (4) 二〇〇〇年〜二月稼働。二基の総出力は一四〇〇kW。事業者は「ノッカマップウインドパワー株式会社」。NEDOウェブサイトに掲載の資料「日本における風力発電設備・導入実績（二〇一八年三月末現在）」を参照した。
- (5) ロシア人の蝦夷地への上陸については、一七三〇年代にもあったとされる。いわゆる「元文の黒船事件（一七三九年）の前段をなす出来事である。本段落については、カラー（二〇〇四）四〇四〜四〇九<sup>六</sup>、東（二〇一七）二二<sup>六</sup>に基づき執筆した。
- (6) 有馬（二〇二〇）一八<sup>六</sup>。
- (7) 本段落については、厚岸町ウェブサイト掲載「厚岸町の歴史物語」を参照した。
- (8) 竹中（二〇二〇）六〜八<sup>六</sup>。
- (9) 新ひだか町役場ウェブサイト掲載「チャシとは」を参照した。
- (10) 根室市公式サイト掲載「根室半島チャシ跡群」を参照した。
- (11) 注9に同じ。
- (12) 注10に同じ。
- (13) 注10に同じ。
- (14) 三輪（二〇二〇）二二〜二四<sup>六</sup>。
- (15) 注10に同じ。
- (16) 本田（二〇一七）一一〜一三<sup>六</sup>。
- (17) ウェブサイト「北海道文化資源データベース」掲載の「蝦夷三官寺国泰寺関係資料」に関する説明を引用した。
- (18) 厚岸町郷土館ウェブサイト掲載「厚岸神社」を参照した。
- (19) 筑紫恋地区では「筑紫恋第一チャシ跡」と「筑紫恋第二チャシ跡」が発見されている。形状は丘頂式。二つを合わせた「筑紫恋チャシ跡」が厚岸町の町指定文化財の指定（一九七八年一月二七日指定）を受けている。
- (20) 有馬（二〇二〇）一八四〜一八五<sup>六</sup>。
- (21) この表現はリーフレット『厚岸町文化財めぐり』などに記載されている。
- (22) 有馬（二〇二〇）一八<sup>六</sup>。

【参考文献・資料】

- (23) 厚岸町海事記念館ウェブサイト「文化財一覧」掲載の「大田屯田兵遺品」に関する説明を引用した。
- (24) 標茶町博物館ウェブサイトに掲載の「利用案内」を参照した。
- (25) 正木（二〇二一）二六〜二七<sup>六</sup>。
- (26) 本段落の内容は、重松（二〇〇四）七七〜七八<sup>六</sup>に基づき執筆した。
- (27) 一般財団法人前田一歩園財団ウェブサイトに掲載の「前田一歩園の由来」を参照した。
- (28) 注27に同じ。あわせて齋藤（一九九九）一一七<sup>六</sup>も参照した。
- (29) 谷本（二〇二〇）三<sup>六</sup>、一一〜一四<sup>六</sup>。
- ・ 東俊佑「安永七年の蝦夷地奉行定書について」（『北海道博物館研究紀要』第二号所収一五〜二三<sup>六</sup>）北海道博物館、二〇一七年三月
- ・ 有馬尚経「屯田兵とは何か その遺跡と変遷」幻冬舎、二〇二〇年七月
- ・ カラー・スサンネ「安永年間のロシア人蝦夷地渡来の歴史的背景」（『スラブ研究』第五号所収三一〜四一三<sup>六</sup>）北海道大学スラブ研究センター、二〇〇四年
- ・ 齋藤玲子「阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート：昭和四〇年代までの阿寒紹介記事を中心に」（『北海道立北方民族博物館研究紀要』第八巻所収一一〜一二四<sup>六</sup>）北海道立北方民族博物館、一九九九年三月

- ・ 重松一義『史料 北海道監獄の歴史』信山社、二〇〇四年一月
- ・ 竹中英泰「近世期の蝦夷地における日口関係史についてー現代の北海道の地方自治との関わりを中心に」(『北海道自治研究』第六二〇号所収二一四頁)
- ・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年九月
- ・ 谷本晃久「北海道開拓の光と影ー「開拓」と「地方自治」をめぐって」(『北海道自治研究』第六一四号所収二一五頁)
- ・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年三月
- ・ 根室市北方領土対策部北方領土対策課編『日本の領土 北方領土【第四五版】』根室市ほか、二〇二一年三月
- ・ 本田良一「北方領土問題の歴史と領土交渉の現段階」(『北海道自治研究』第五八四号所収二二〇頁)
- ・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇一七年九月
- ・ 正木浩司「北海道近現代史研究会・第二回現地視察レポートー北見市・佐呂間町・網走市を訪ねて」(『北海道自治研究』第六二六号所収二〇三頁)
- ・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二一年三月
- ・ 三輪修彪「アイヌモシリの行方と松前」(『北海道自治研究』第六二二号所収一七二頁)
- ・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年一月

### 【参照ウェブサイト】

- ・ 阿寒湖アイヌコタン  
<https://www.akanainu.jp/>
  - ・ 阿寒湖の森ナイトウォークカムイルミナ  
<https://www.kamuyumina.jp/>
  - ・ 厚岸町教育委員会  
<http://edu.town.akkeshi.hokkaido.jp/>
  - ・ 厚岸町役場／厚岸町の文化財  
[https://www.akkeshi-town.jp/syoukai/rekishi\\_bunka/culture/](https://www.akkeshi-town.jp/syoukai/rekishi_bunka/culture/)
  - ・ 厚岸町役場／厚岸町の歴史物語  
[https://www.akkeshi-town.jp/syoukai/rekishi\\_bunka/history/rekishi/](https://www.akkeshi-town.jp/syoukai/rekishi_bunka/history/rekishi/)
  - ・ 一般財団法人前田一步園財団  
<https://www.jpopen.or.jp/>
  - ・ 国立研究開発法人新エネルギー産業技術総合開発機構 (NEDO)  
<https://www.nedo.go.jp/>
  - ・ 標茶町博物館ニタイ・ト  
<https://www.sip.or.jp/~shibecha-museum/>
  - ・ 新ひだか町役場／チャシとは  
<http://www.shinhidaka-hokkaido.jp/hotnews/detail/00005124.html>
  - ・ 根室海上保安部  
<https://www.kaiho.mlit.go.jp/01kanku/nemuro/index.htm>
  - ・ 根室金刀比羅神社  
<https://www.nemuro-kotohira.com/>
  - ・ 根室市観光協会  
<https://www.nemuro-kankou.com/>
  - ・ 根室市公式サイト  
<https://www.city.nemuro.hokkaido.jp/>
  - ・ 文化庁／国指定文化財等データベース  
<https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index>
  - ・ 北海道遺産  
<https://www.hokkaidoisansan.org/>
  - ・ 北海道文化資源データベース  
<https://www.northernross.co.jp/bunkashigen/index.html>
- ※ 最終閲覧は、二〇二二年三月一日である。  
 へまろろ ころじ・公益社団法人北海道地方自治研究所研究員